
怪談

湯たぽん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怪談

【Nコード】

N3086S

【作者名】

湯たぽん

【あらすじ】

オウルベアの少年、ユタは奇妙なものを村に持ち込む問題児。しかも家だろうとドラゴンだろうと、どうやるのか温泉すらも気に入ったモノは全て持ち上げて持ってきてしまうのだから手に負えない。

今回もとんでもないものを持ち込んでくれたようです。

オウルベアシリーズ第三弾。タイトルとは違い、ホラー要素は一切ないほのぼの童話調ファンタジーです。

その1

マカはあきれ返って、自宅の目の前に置かれたそれに見入っていた。クマとフクロウがあわさった生き物、オウルベアである彼女は、相変わらず綺麗に整えられた橙色の毛に覆われた身体にいつも通りのぴったりとしたチョッキを着ていた。あきれてぽかんと開かれた口は尖った嘴になっている。3メートル近い巨躯でありながら、遠くからみるとその風貌はとても可愛い小熊というから不思議な種族だ。

（・・・またか）

この子には驚かさね慣れている、次こそはもう驚かない。あきれない。そう心に決めてはいたのだが。

自分の間抜け顔に気付き、マカは改めて頭を抱えた。が、だからといってあきれるのを止める事も出来ない。

マカは力の抜けた顔をそのままに、目の前で自分の顔を楽しんでいる友人を見た。

「・・・やってくれたわね、ユタちゃん」

マカに睨まれ、にんまりと笑い返したのは、緑色の体毛を持った子供、オウルベア、ユタだった。

「えへへ、見ての通りだよ、マカ。どう？これ」
「どうって・・・」

逆に聞き返され、マカは再び庭に置かれたそれに目をやった。

今までこのユタには酷い目にあわされてきた。

オウルベアという種族はもともと好奇心と力が強く、興味を示した物をすべて持ってきてしまふという性質があるが、

この子はその傾向が異常に激しい。

人間の街から何故か電柱を持ってきたり、引越しをすると言うから手伝いに行ったら自分の家を持ち上げて歩いているところに出くわしたり

彼が何かを持っているところを見た時はろくな事が無い。一番ひどい時などはマカの家の庭にドラゴンを持ち込んだのだ。

そんなユタの奇行に慣れ、それでもそんな彼を慈しむ、心やさしいマカ。

しかし村一番の問題児のユタは、容赦なくマカに問題を吹っかけてくる。なつく故の行為であるのだが・・・。

今回のそれは今までのどの事件よりも奇妙なものだった。

「・・・え、これオバケ・・・？だよね」

誰がどう見てもオバケだった。マカの庭、レンガで綺麗に囲われた花壇の中に置かれている。

いや、厳密には置かれてはいない。浮いているのだ。

初めは白い体毛のオウルベアかとも思ったが、よく見ると色は白というレベルではなく、半透明。

腰から少し下はスカートのようにひらひらと風に舞っており、足が無い。

マカの好きなマリーゴールドの種を撒き終えたばかりで、芽も出ていない花壇にモノを持ち込まれれば、さすがのマカも激怒するところであるが、そのモノが質量があるのかどうかも怪しいのであれば怒ることも出来ない。

（・・・いや、そんな次元の話じゃないってば）

頭の中で自分に突っ込みを入れると、マカはオバケに手を伸ばした。触れても質感はなく、すり抜けるのでどう見てもオバケではあるがそれはオバケという言葉の持つイメージとはかけ離れた存在であった。

まったくもって怖くない。可愛いのだ。

くつきりとした丸い眼はきちんと瞳があり、短いまつ毛もどことなく品が良い。

顔も横に丸く、控えめなくちばしは同じオウルベアからして見ればうらやましいほど綺麗だ。ユタと同じチョッキまで着ている。

オスの、ユタより多少年下に見えるオウルベアのオバケだった。足は無いが。

（うーん・・・）

そもそもが真っ昼間から現れたオバケということで全く恐ろしくなく、マカは珍しく興味を持ち観察し始めた。

ユタが自然に持ってきたオバケではあるが、何故かマカには持ち上げられなかった。

当然である。手がすりぬけるのだ。

何でユタちゃん持てたのかしら・・・

ユタははつきりとオバケを持ち上げながら庭に持ち込んできていた。どうやら彼にだけ持てるらしい。

マカはぼやきながらにこにこ見下ろしているユタの前でオバケを観察していた。

その2

「バケ・・・バーケー」

不意に、マカの後ろから声がした。

ハツとしてマカは振り返った。娘のスフレだった。

赤ん坊のスフレをゆりかごで寝かしつけておいて、すっかり忘れていたのだ。

「あ、スフレちゃん！起きたんだー」

スフレを自分の妹のように溺愛しているユタは、恐ろしい速さでオバケとマカの側を通り過ぎ、ゆりかごを覗きこんだ。

「おはよースフレちゃん。お昼寝気持ちよかった？」

オレンジ色の毛を丁寧に整えるように撫でながら、ユタ。

顔だけちよつとマカの方に向けると、珍しく遠慮がちに聞いてきた。

「抱いていい？」

肯定の意味でにつこりとマカが微笑むと、ユタはなんとも嬉しそうに、しかし丁寧に丁寧に、スフレを優しく抱きあげた。

いつもこうだ。ユタならばといつでも抱かせてあげているのに、マカの許可なしには決して抱こうとしない。

普段は村の誰に迷惑をかけてもしれつとしているユタだが、スフレに関してだけは驚くほど気を使っている。

「良いなースフレちゃん。ちょうだい」
いつもこう言う。

「だーめ。スフレは私のスフレなの」

いつもの返答を聞いた時の、ユタのたまらなくうらやましそうな顔を見るのが、マカは好きだった。

「そうだよ、マカのスフレちゃんだから、スフレちゃんなんだよ

ねー・・・だからちようだいなんだけど」

分かるような分からないような、微妙な事を言いながら、相変わらず丁寧なスフレを腕の中で揺らしているユタ。

「バケ？バケー」

「バケじゃないよ、オバケだよー。お水のおじやないから、オをつけないとオバケじゃないんだよー」

あやす言葉も微妙に意味が分からない。まだ子供だから当然と言えば当然だが、お父さんになるにはまだまだだようだ。

「ほうらスフレちゃん、これがオバケだ・・・よってあらら、また寝ちゃった」

スフレもユタはお気に入りのようなのだが、まだ寝足りなかったのかすぐに寝息を立て始めた。

起こさないように、さらに丁寧なゆりかごへスフレを戻すユタ。

「よっ・・・せ・・・つと」

ゆっくりとスフレを下ろすと、

「さて！」

すぐさまオバケのところに戻ってくる。この切り替えこそがユタの真骨頂といえた。

「沼のへん歩いてたら見つけたんだけどね。すごいでしょーこの子」

（この子・・・？）

なんだかオバケを友達を紹介するような言葉と手振りで指すユタに、マカは何故か違和感を覚えた。

「良い、見ててよ・・・」

ユタはオバケの腰（足がないのでオバケ本体の一番下の部分にあたる）あたりを持つと、オバケに向かってささやいた。

「投げるから、浮いててね・・・そおれ！」

ドラゴンをも持ち上げる怪力で上空へ放り投げられたオバケは、マカの家よりもさらに高い位置で静止した。
穏やかな日差しと、気持ちのいいそよ風に吹かれた綺麗なオバケは、ますますオバケらしくない姿であった。

「へへー、マカ、すごいでしょルック」

布のようになっていいる腰の部分をふよふよとなびかせながら、ゆっくりとオバケが下りてくると

マカは先ほど感じた違和感を確かめようとユタの方を向き、オバケを指差してまくしたてた。

「ねね、ユタちゃん。その・・・あのオバケ？って話できるの？」

オバケが下りてくるのを楽しそうに眺めていたユタは、マカの質問に不思議そうな顔を作ると

「当たり前じゃない？オウルベアのオバケだもん。ルックっていうんだ、この子」

平然とオバケを、今度こそマカに紹介した。

ルックと呼ばれたオバケは、真っ白な身体をマカの方に向け、あいさつするように小さく震えた。

「よ・・・よろしく、ルック。私はマカ」
こちらも軽い震えとともに、マカ。やはりオバケだ・・・いまさら恐怖が沸いてきた。

（スフレが寝てくれてよかった・・・）
ちよっぴり娘を心配して、原因を連れてきたユタをにらむと、相変わらず無神経なユタは全く気付く気配もなく
再びオバケを持ち上げ、頭上にかかげた。

「ルックね、こうやって持ち上げるとしゃべるんだよ」
ユタが言うが早いか、さっそくルックが一つ震えるとしやべりだした。

「おうち・・・おうち・・・」

それは、オバケらしい幽かなかすれと共に、妙な甘さも伴う奇妙な声だった。

「おうち？私の？お・・・オバケはちよつと・・・」

既にオバケに自宅の庭にまで侵入されているという事を思い出し、
壮絶に引きながらマカ。

「いや、違うよマカ。ルック、マカにも教えてあげて？」
小さな子供をあやすような口調でユタが優しく促すと、ルックは再び小さく震え、先ほどよりもしっかりした声で話し始めた。

「おうち・・・かえりたい。いりえの・・・おうち・・・ぼくの」

その声は甘えているようでもあり、寂しそうでもあった。
半透明な顔は無表情だが、久しぶりに友達が出来てはしゃぐ小さな
子供の感情はマカにも十分伝わってきた。

（そっか・・・元とはいえこの子もちゃんとしたオウルベアなのね）

「入江つていうと、村から一番近いのは人間の街の向こうになるね。
ちよつと遠いけれど・・・」

ちよつぴり怖がった事を心の中で謝ると、マカは家の中から地図を
持ってきた。

ばさり。

玄関先のテラスに置いてあるテーブルに地図を広げると、ルックは
意外なはやさで庭から上ってきた。どうやら自力で動けるようだ。

「・・・あ・・・ここ・・・おうち・・・ぼくの」

ルックが震える指で差したのは、マカの予想通り人間の街の向こう
側だった。

盆地にある人間の街をちよつと真ん中に、オウルベアの村の反対側
というところだ。

山をいくつか越える険しく遠い道のりだが・・・

「ちよつとした遠足つてところね。ちよつと良いじゃない、今から
行かない？」

マカ達オウルベアにとってはほんの遠足程度の距離だ。

さつそくマカは弁当とスフレを背負う紐を用意しはじめた。
なんだかんだでマカも切り替えの早い、ノリのいいオウルベアであ

る。

一時間後には早くも準備を済ませて、マカはスフレを、ユタはルックをそれぞれ背負って村の出口にいた。

「スフレちゃん大丈夫かなあ？いいの？マカ」

相変わらずスフレに対してだけ過保護なユタ。マカは苦笑いするしかないが

産まれたばかりとはいえスフレもオウルベアである。転ぼうが崖から落とそうがピンピンしてマカの背に戻ってくる頑丈な子だ。

「さて。じゃあまずは人間の街を目指せばいいんだよね？」

”おかえり、バルビレッジへ” 木彫りの妙に派手な看板の下を通り抜け

久しぶりにマカ、スフレと一緒にのどかけでテンションだだ上がりのユタは

ルックを背負っているにも関わらず機嫌よく跳ねながら歩き始めた。

その3

村を出ると、外はちよつぴり冷えた空気が吹いていた。

「わ・・・ちよーっと寒いかな。厚めのチョッキにすればよかったなあ」

スフレが風邪をひかないように、マカが背中から腕に移動させてしっかりと抱きなおしていると、

ユタは子供らしく、寒さなど感じてもないかのように跳び回っていた。

「そう？もうちよつと強く吹いてくれないと暑いくらいだよ、僕」
相変わらず元気に、ルックを頭上にかかけたり、上へ放り投げたりしている。

（・・・寒さよりも、このルックが問題なのよ、ユタちゃん）
マカがこっそり心の中で舌を出す。

それもそのはず。

オバケなのだ。白オウルベアのルック。ユタにぼんぼん投げられているが

たまに空中でぴたりと止まり、ふよふよとゆっくり降りてくる。

しかしオバケとはいえ、綺麗な毛、顔、さらに真昼間ということもあり全く怖くない。

むしろユタがほとんどこのルックを友人扱いして一緒に遊んでいるので

マカにとってはオバケ扱いしてしまっている事が申し訳ないくらいだ。

「う、うん。そうね。ルックも気持ちよさそうに浮いてるし。いい遠足日和かもね」

なるべくルックにも声をかけてあげられるように気をつけながら、マカも元気よく歩きだした。

「あ、でもスフレちゃんには寒い？出かけるの明日にする？」

ユタは相変わらず赤ん坊のスフレを溺愛している。

村から出て2、3歩も歩かないうちに戻ってきて、マカの腕の中を覗き込んできた。

ユタの気遣いは嬉しいが、せっかく弁当まで準備したのにここから引き返すのはなんだかもったいない。

それに飯にもオウルベアであるスフレがこの程度でまいるわけはない。

「大丈夫、なんてったって私の娘なんだから。このくらいで風邪ひいたりなんかしないわよ。」

何があっても私がスフレを守っちゃうんだから」

マカがそう言っただけ胸を張ると、何故かユタはうらやましそうにマカを見た。

「そうだね。マカは良いお母さんだなー」

スフレの頬をちょこんとつつくと、再びルックを持ち上げて歩きだした。

「ルックは大丈夫？そういうえば昼間に歩き回ったりして良いのかな。気分悪くなったりしたらすぐ言いなよ？」

昼間かどうかはともかく、オバケに気分悪いも何もあるのかな・・・とは声に出さず、マカもスフレを抱いて一緒に歩き出した。

風はあるが、空には雲一つなく、木の少ない山にある村からは綺麗な景色が広がっていた。

「良い天気ねー。遠くがよく見えるわ」

高い山がいくつも連なる険しい土地だが、

遠目に見渡すと小さな丘がぽこぽこ生えている箱庭のように見えて
面白い。

「ルックはその入江の家で生まれたの？ほとんどのオウルベアは私たちの村で生まれ育って、外に出るのはほとんどいないのに」

「あんまり・・・覚えてない・・・ずっと独りだった気が・・・する」

ルックは一人で浮きながら動けるはずだが、ユタが持ち上げていないとしゃべれないためずっとユタが背負っている。

「あ、スフレ起きたね。おはよ」

「ルク、ルックー」

「あ、ルック。スフレちゃんに気に入られたみたいだよ。良かったじゃん」

「こんなに近くに・・・人が何人も居るなんて初めて・・・嬉しいな・・・」

ユタの背中で、透明な身体を嬉しそうに震わせてルック。心なしか言葉も明瞭になってきている。

そんな風に、3人でいろいろ話しながら一つ、山を越えた時だった。

ズシン！

下の方からすさまじい音が聞こえた。

ズシン！　ズシン！

だんだん近づいてくる。足音のようだ。

とてつもなく重い、何かが近づいてくる・・・。

「あーこの足音はもしかして・・・」

が、マカは慌てない。ユタもむしろ嬉しそうに岩で隔たれた坂の向こうを見ようと背伸びしている。

「そうだね。こんな大きな足音立てられるのはあの子しかいないよ！」

その4

果たして岩の向こうから出てきたのは、2人の予想通りの人物だった。

「ヴィックスさん！」

「マカさん？ユタちゃんも！」

「やっぱりヴィックスちゃん！」

2人の顔なじみ、ヴィックスであった。青のメスオウルベアだ。

青い毛並は山道をしばらく歩きとおしていたとは思えないほど綺麗に整えられ、耳はちょっぴりギザギザにオシャレなカットが施されている。

そしてこれまた山道には似つかわしくないほど綺麗な白い服を着ている。

村一番のオシャレ好きとして知られるヴィックスは、同時に村一番の剛力の持ち主でもあった。

彼女のオシャレは自分の身だしなみだけではない。庭は常に適度な長さに刈り込まれた芝生に覆われ、美しく実ったリンゴの木や花に囲まれた噴水、可愛いダックスフントなどを飼ったりしている。家の中には確かパイプオルガンがあったはずだ。

当然、オウルベアらしくそれらすべてをどこから持ってくるのだ。どうやるのか噴水すらも。

今日も涼しい顔をしながら、なんと金剛石の巨大な塊をかついでいる。

巨大な種族であるオウルベアと、同じくらいの大さの鉱石塊。しかもところどころクリスタルのようなものも突き出ている。

とても美しい姿であるが、重量は多少少なく見積もってもkgでは表せない。

「わ！何それユタちゃん！？」

そんな超重量の身でありながら、ユタが背負っているルックを見るや否や瞬時に迫ってきた。金剛石を持ちながら、である。

「ふふん、どう？ヴィックスさん。ルックっていうんだ」

誇らしげにユタが紹介する。

世界中を旅して、金剛石だけでなく珍しいモノを集めて回るヴィックスでも、さすがにオバケは見た事がないらしい。

「しかしヴィックスさんが持つてるのもすごいね。綺麗だなー・・・。金剛石？よくこんなの持つてられるね」

「うん。こんな大きなのが手に入るとは思わなかったよ。でも、ルック？うわーすごいね。初めて見たよ」

お互いの腕の中を興味津津で覗きあう2人。

こうなるとしばらく動かないので、マカは草地に座りスフレにミルクをあげはじめた。

（2人とも、あれだけ珍しい物揃えてるのに。お互いの見つけてきたモノを素直にすごいと言えるのって。なんか良いなあ）

不意に、まだルックを「モノ」として見てしまっている事に気付き、マカは一人猛烈に顔を赤くした。

こっそり反省しているところを、タイミング悪くスフレを見に来たヴィックスに見られてしまった。

「あれ？マカさん何赤くなってるの？やほースフレちゃん！」

「ちょ・・・！ヴィックスさん、やめてよ金剛石持ちながらスフレちゃんに近づくの、危ないでしょ！」

後ろから慌ててユタがひきはがしに来た。

「あはは、ごめんごめん。これからルックの家に遊びに行くんだよね？ちよつとこの金剛石家に置いてくるよ。

あたしも行つていいでしょ？」

特に悪びれもせず謝ると、ゆっくり歩いてーと2人に頼み、ヴィックスは来た時と同じすさまじい足音を立てながら村へ向かっていった。ダッシュで。

「いやあ・・・相変わらずすごいわねえ、ヴィックスちゃん」

「ヴィク、ツヨー」

「欲しいなー僕もあの綺麗なの」

「・・・うらやましい・・・な・・・」

それぞれ勝手な感想をつぶやくと、言われた通り足取りをのんびりなものに変え、再び歩き出した。

（それにしても、ヴィックスちゃんもあつさりルックを友達として見てたわね。家に遊びに行く、だつて）

またしても自分が恥ずかしくなるマカ。

なんで私だけルックを認めてあげられないのかな・・・。

そんな事を考えながら、ルックを背負ったユタの方をちらと見ると・
・

(え・・・！？なんでユタちゃん汗だく！？)

すさまじい量の汗がしたたっていた。

表情はいつもの通り、微笑の絶えない楽しそうな顔だったが、時折口の端から犬歯が覗く。やや苦しそうだ。

「ユ、ユタちゃん？どこか調子悪いの？」

慌てるマカに対して、ユタは不思議そうな顔を向けた。

「ん？どうしたのマカ。調子って？」

どうやらユタは自身の身体の異常に気がついていないようだ。

猛烈な汗をかきながら、暑さのせいと思っっているのだろうか。チョッキをばたばたさせて緑の毛の奥へ風を送り込んでいる。

「ちょ、ちよつと待って！ほら、ここもう村から結構歩いてきちゃったから、ヴィックスちゃん追い付くの大変よ。」

少し休憩して待ちましょう」

説明するよりもまずユタの状態を確認するのが先と、マカはひとまず休憩を宣言し、息をつかせた。

「大丈夫、ユタちゃん？すごい汗」

タオルで顔を拭いてやると、熱があるわけではないらしい。

汗のかき方も異常というほどではなく、ちよつとした運動をした後という感じだ。

息も正常だし、どうやら単に疲れただけのようだ。

(ユタちゃんが山1個越えたくらいでこんなに汗かいてるなんて不思議・・・ルックが重いわけではないし・・・)

ユタの隣でのんきにふよふよ浮いているルックにそんな重量があるとは思えない。

しかし、人間の街はもう少し先、ルックの言う入江の家まではさら

に歩かなければならない。

（ヴィックスちゃん、まだかなあ・・・）

さすがのマカも、この遠足の行く先が少し不安になってきていた。

その5

「おつ待たせ！」

すさまじい勢いでヴィックスが戻ってきたのは、空がだんだん茜色に染まってくる頃だった。

村まで結構な距離があつたはずだが汗ひとつかいていない。

（ユタちゃんも本来”あつち側”の子なんだけどなあ・・・？）
ここまで歩いてきただけで大汗をかくほど体力を消耗していたユタとヴィックスを見比べ、マカは首をかしげた。

「おかえりーヴィックスさん。さっそく行こうか。入江までもうちょつとあるみたいだよ」

とはいえ、しばらく休憩していたおかげでユタはすっかり体力を取り戻し、顔色も良くなっていた。

ルックをかつぎ上げると先頭に立って歩き始めた。

「あ・・・ユタ・・・美味しそうなリンゴ・・・あれ・・・」

「お、ルック目がいいねー。食べる？とつてあげるよ」

ルックはユタの背中できよろきよろあたりを見回しては、気に入ったものをユタに取ってこさせている。

当然、オバケのルックにはリンゴは食べられないが。

果物だろうと石だろうと、ルックが喜ぶものは、とユタも嬉々として拾ってきている。

「いいなーユタちゃん。ちょっとルックあたしにも持たせて？」
ヴィックスはルックに興味津津のようだ。ユタの周りをぐるぐる回りながらルックを観察している。

すると、ルックはちよっぴり迷うようにいつもより少し長く震えてから答えた。

「やだ・・・ユタがいい・・・」

自分をつかみ上げているユタの手にしがみついているように見える。

「ええー・・・あたしやなの・・・」

ヴィックスはすぐさま見るからに残念そうにしょんぼりと肩を落とした。

この感性の鋭い少女はいつでも感情をストレートに表すようだ。

（基本的にユタちゃんと性格そっくりだけど、この点だけ違うのよねー・・・）

ヴィックスを可愛そうに思いながら、少し遅れて歩いていたマカはまたしても寝ているスフレを起こさないように、しかし慌てて前に追い付いた。

「あ、あはは・・・ユタちゃんとルック、すっかり仲良しになったわね」

フォローするも、ヴィックスはまだ未練があるようだ。

感情ストレートとはいえ、やはりオウルベア。いつまでもへこんでいるはずはなく、

先頭を歩くユタの隣を歩き、果敢ともいえる勢いでルックに向かっ

ていく。

「ねね、ルックはどうして死んじゃったの？」

その質問は・・・と思わないでもないが、ルックは特に気にすることもなく、のんびり答えてきた。

「あんまり・・・覚えてないけど・・・確か重いものを持ち上げようとして・・・持ちきれなくて・・・」

「ぺしゃん？」

「・・・そう・・・たぶん・・・」

（ユタちゃん、オバケになっちゃったりしないかしら）

マカはなんだか何でも持つてくるユタが心配になってきた。

そんな縁起でもない事を考えながら歩いてみると、一行は山地を抜け、人間の街のある盆地にさしかかった。

「ユタちゃん、まだ人間の街に通っているの？」

マカに聞かれ、ユタは気軽にうんと答えた。

3か月ほど前、ユタがスリーピードラゴンを村に持ち込むという事件が起きた時に、成り行きで彼は人間と交流する事になり

急にオウルベア達の生活が機械化され始めるきっかけを作ったのだった。

紅茶好きのマカにとっては、電気ケトルというのは非常に便利だ。

まだ人間の道具が導入され始めて間が無いが、これからもっといろいろなモノが増えるだろう。オウルベア達は皆ユタに期待している。

「スリーピー探しあてたり、人間の街に通ったり、オバケと友達になったり、ユタちゃんは波乱万丈だねー」
ヴィックスもなんだかうらやましそうだ。

「あつ・・・ユタだ」

不意に、遠くから小さく声が聞こえた。

声のした方を見ると、いつの間にか人間の街が目の前になっていた。街の入り口で人間の子供がこちらを指差している。

（さすがユタちゃん、人気者・・・というわけでは・・・）
ないらしい。子供達は身体の大きなユタ達に若干おびえているように見えた。

そして後ろの方に手を振ると

「ユタだけじゃないよ！なんかいっぱいいる！早く交渉の人呼んできて！」

焦って大人を呼びに行ったようだ。

「・・・？」

妙な展開に街入口で立ち止まり、マカとヴィックスが疑問符を上げていると

大人の人間がにこやか（のつもりらしい）な顔を作って出てきた。

「や、やあユタ。今日はまた大勢で何の用だい？携帯電話の件だったら確か来月じゃなかったかな・・・？」

明らかな作り笑顔。

ユタは人間の街に良く行っているはずだが、どうも歓迎されていないようだ。

マカは心配してユタの方を見やると、先ほどと同じく結構な量の汗をかきながらこちらも若干作っただような笑顔を浮かべていた。

「いやあ、急にごめんね。今日は単に街の横通るだけなんだ。この先の海へ行きたいんだ」

その言葉を聞いて、隠しもせずにはっと息をつく交渉人(?)さん。

(そうだった・・・)

めったに見ない、このユタの作り笑顔を見て

マカは思い出していた。そっくりな性格のユタとヴィックスの唯一の違い。

(嫌な事があると、ヴィックスちゃんはストレートにしょんぼりしちゃうけれど・・・)

(ユタちゃんは我慢しちゃうのよね)

さつきから大量にかいていた汗はこのためなのかな・・・。

マカはユタの事がどんどん心配になってきた。

「うーん。人間の街ってあたし久々に来るけれど、変わっていくの超早いよねえ?」

何故か「遠慮しないで街の中堂々と通っていきなよ」と勧められ、ショッピングモールの中を歩くオウルベア3人。

予想通り人間達は歩いておらず、しかし店の奥や二階の窓あたりから視線だけ感じる。

先導してくれている交渉人さんも自分の背後に過剰なまでの気を配っているようだ。

「と・・・ところでユタ？」

商店街を抜け、向けられる視線が少なくなってきたところで、緊張しっぱなしで今までもくにしやべらなかつた交渉人さんが背中を向けたまま話しかけてきた。

「君が今背負っているモノって・・・もしかして・・・幽霊？」
しまった。ハッとしてマカもルツクの方を見た。

ユタも同じ事を思ったらしい。一瞬息詰まったが、素直に答える。
「・・・うん、そうだよ」

ひいひい・・・！

交渉人さんの両肩が派手に跳ねる。

隠れていた人間達も気がついたようだ。

かすかに感じていた人間達の視線が一層険しくなるのを感じた。

（はやく街を出なきゃ・・・）

マカはなるべく小さくなりながら、急ぎ足で歩き始めた。

隣にいるヴィックスもどうやら同じ事を考えているようだ。

無表情でなるべく周りを見ないように速足で歩いている。

（この街に通うユタちゃんの立場を、私たちのせいでこれ以上悪くするわけにはいかない・・・）
時刻は夕方から夜へとさしかかってくる。空の色と同じく、気分までだんだん黒くなっていくようにマカは感じた。

そんな時に限って、ユタの背中で無責任に震えるモノがあった。

「あ・・・ユタ・・・」

ルックである。今まで大人しかつたのに、人間の視線などまるで気にせず上の方を指差す。

「あ、ちよつとルック・・・」

ヴィックスが慌てて止めるのもまるで無視でしゃべりだす。

「あれ・・・看板が・・・光ってる・・・面白・・・」

「わっ・・・うわぁ!!」

幽霊がしゃべりだした事で、ついに耐えきれなくなったのか交渉人が駆け出してしまった。

たちの悪いことに、完全には逃げ出さず物陰に隠れてこちらをまだうかがっている。

「ん・・・？どうしたのルック？」

皆より遅れてルックの声に反応したユタは、いつの間にやら山を越した時よりはるかに疲れた顔をしていた。

振り向く動作も緩慢で、滝のような汗がしたたりおちている。

その姿を見て、唐突にマカは閃いた。

（ユタちゃんが疲れているのって・・・やっぱりルックを背負って
いたからなんだ・・・！）
オバケであるルックに重量はないが、持ち上げるといふ事はすなわ
ち取り憑かれるという事。
持ち上げられると喋り出すというのも、体力をルックに奪われるか
らだったのだ。

その6

「あれ・・・光る看板・・・欲しいな・・・」

人間の街では以前からあったとるに足らないパチンコ屋のネオンをねだるルック。

疲労で思考力も弱まっているのか、ユタもふらふらと看板に近づき、ひっこ抜こうとしはじめた。

（わ・・・私になんとかしないとユタちゃんが！）

マカは慌てて決心すると、つかつかとユタに近寄ると、手をしっかりと握った。

「ダメよ、ユタちゃん」

ユタの手が止まり、ルックが驚いたように震える。

「嫌・・・ユタ・・・これ欲しいよ・・・」

なおもねだろうとするルックごと、ユタを引きずるようにして歩き始めるマカ。

「あ、マカさ・・・ん。あたしスフレちゃん持つよ」

ヴィックスも、迫力に多少圧されながらもマカを手伝い、ユタを街の反対側出口へと連れ出した。

「あれ、マカ。ヴィックスさんまでどうして・・・」

憔悴したような顔になっても、まだユタはネオンから目を離さない。

「ルックが欲しがってるのに・・・」

「欲しい・・・のに・・・邪魔するの、マカ・・・？」

ルックも恨めしげに非難の声をあげる。

「いいから座って・・・ユタちゃん。ほら、ルック下ろして」

人間の街から離れて、ススキの原っぱに囲まれた街道に出ると

ユタの血の気の引いた顔をタオルで拭いてやりながら、ヴィックスはユタを座らせ、マカはルックを引きはがした。

何故か最初は触れなかったが、ユタを助けなきやという願いが通じたのか、マカが触れるとしっかりと持つ事ができた。

「マカ・・・嫌・・・ユタが・・・持ってきてくれるのに・・・」

「いい加減にして!」

なおも恨めしげにつぶやくルックに、マカはヒステリックな声を張り上げた。

「あなたが取り憑いてるから、ユタちゃんこんなに疲れちゃってるじゃない!

その上人間と仲良くしたがつってるユタちゃんの邪魔して、何を考えているの!」

「マ、マカ?」

怒られている当のルックよりも、むしろユタの方が驚いたようだ。引き離されたルックをかばうように前に立ち、マカの顔を覗き込むユタ。

「ルックが欲しがってるんだから・・・良いじゃない・・・か」

途中からマカにすさまじい形相でにらまれたためか尻すばみになるが、ユタはまだルックをかばおうとしていた。

再びススキの野っぱらに怒号が鳴り響く。

「ユタちゃんも何考えているの！人間にあんな風に避けられてるなんて私たち知らなかったわよ。」

それはまあ良いとしても、ユタちゃんルックのいいなりになりすぎよ！

ただでさえ避けられてるのに、あんなところで看板なんかひっこ抜いたら街でのユタちゃんの立場どうなると思ってるの」

勢いのついたマカはまだ足りないとはかりに溜まっていた感情を次から次へと吐き出していた。

「ルックも！あなた自分で動けるでしょう。しゃべれなくなるのは可愛そうだと思うけれど、

あなた持ち上げててユタちゃんすごい疲れてるのに、自分ばかり欲しいものねだっちゃダメでしょう！」

ルックにも詰め寄るマカ。

と、またしてもユタが間に入りかばいだした。

「で、でもほら・・・ルックはモノを持ち上げられないんだし、僕がやってあげないと・・・ね？」

しかしマカもここまできたら引き下がらない。

「だからって、何もかも人任せで何もしくて許されるわけじゃないの！

ユタちゃんも、全部やってあげることがルックのためじゃないって分かって！」

「でも、マカだってスフレちゃんの事全部やってあげてるじゃない・・・」

マカの迫力に圧され、しどろもどろになりながらも反論するユタに、さらにマカはカッとなった。

「スフレは私の子供！オバケなんかと一緒にしないでよ！」

マカの言葉に、石でもぶつけられたように大きくルックが震えた。激昂していたマカもハッと気付き慌てて口をふさぐ。

「あ・・・ごめん、ルック。言いすぎた・・・」

ルックをなだめようと近づくも、間に入っていたユタが背を向けてルックをなぐさめていた。

どうやらユタも少し怒らせてしまったらしい。

顔を真っ赤にして興奮していたマカだが、自らの失言で一気に冷めて肩をすぼめて小さくなっていた。

「ユタちゃんも・・・ごめん」

ルックを心配そうに見つめていたユタは、謝罪を背中中で聞きながらすとぼりつぶやき始めた。

「僕は・・・マカになりたくてさ。ルックが沼地で寂しそうに落っこちてるの見た時そう思ったんだ」

「・・・？」

また、良くわからない事を言い始めて・・・とマカが疑問符を浮かべていると

それまで会話に混じる事ができず、傍でおろおろしていたヴィックスが入ってきた。

「ユタちゃんは・・・お父さんになりたかったんだよね、ルックの」指摘されて驚いたのか、ユタもちよっぴり、ルックと同じように肩を震わせた。

ゆっくりと振り向くと、小さく頷いた。

「あたしなんとなく気がついてた。マカさんとスフレちゃんがつらやましくて仕方がなかったんでしょ」

再びユタが、先ほどよりもしっかり頷く。

マカは唐突に、ユタの心情をすべて理解した。

「そう・・・か。だからだったのね・・・」

スフレをやたら気にかけるのも、スフレを欲しがるのも、すべてはユタ自身がお父さんになりたいからだった。

しかし、未だ子供のままのユタが急に親になる事はできない。

スフレに対しても過剰に丁重なだけで、育てるには程遠い扱いだった。

ルックも甘やかすだけ。

それでも。

「親になろうと思うって。すごいよ。」

たとえ上手くいかなかったとしても、ユタちゃんすごいと思うよ、あたしは」

ヴィックスに言われて、ようやくユタは立ちあがり、マカの方を向いた。

まだルックをかばう位置にいるが、その眼に先ほどのような険は見えない。

「でもやつぱり、上手くはいかないね。マカのほうがもつとすごいよ。」

さすがスフレちゃんのお母さん」

そして、今度はルックに向かって

「ルック、ごめんね。僕なんかがお父さんっていうのもおかしいよね。」

でも、なんかルックがとても小さく見えたから・・・」

それまで黙っていたルックが、夜の闇に溶け始め見えにくくなってきた身体を精一杯震わせて、今まで無かった感謝の言葉をつぶやいた。

「ありがと・・・ユタ。お父さん・・・には見えないけれど

僕は・・・嬉しかった・・・」

その言葉は、今までになかった感情のこもった、幽かだけれど素敵な声だった。

「マカも・・・ありがと・・・。僕も ユタに・・・嫌な思いはしてほしく・・・ない・・・。ごめんね・・・」

最後の言葉はこの場にいる全員に向けられたものだった。

「・・・あれ？なんか脚と肩が軽くなったよ」

突然、ユタが元気よく跳びはねはじめた。

それまで大汗かいて、まっすぐ歩くのも怪しいほどの疲れようだったのが嘘のようだ。

ルックと和解し、うまく同調することが出来るようになったのだろうか。

「ルックがユタちゃんに気をつかってくれたのかしらね。

ちよっと道草食っちゃったけれど、入江の家に急ぎましょうか！」

その7

入江にたどりついたときには、周りはすっかり暗くなっていた。

「わー・・・なかなか綺麗じゃない？」

太陽の代わりに水面に映り始めていた月は、今日は半月だった。程よい風と、流れる雲が変わりゆく景色を演出してくれる、良い夜だ。

入江に面した砂地に、ルツクの家らしき廃屋が岩場を背景に建っていた。

屋根も半分近く落ち、壁も穴だらけだが月や星を眺めるにはかえっていい場所になっている。

「懐かしい・・・変わってない・・・」

ルツクが感激に震えながら穴だらけの家をあちこち飛び回り始めた。

（変わってない？もともと穴だらけだったのね）

「なかなかいい家ね。ここから綺麗な月が見えるみたい」

ヴィックスはほこりだらけの床にシートを敷き、天井に開いた大穴から月を楽しんでいた。

「あ、本当だ。僕も・・・よっこいしょ」

妙にオヤジ臭い掛け声とともにユタも寝っ転がった。

マカも（よっこいしょと言わないように気をつけながら）ユタに倣って月を見上げようとすると

「うつ・・・うつ・・・」

ルックだった。天井近くまで浮きあがり、月の見える穴から外を覗き

泣いていた。

「ルツ・・・」

ユタが手を伸ばそうとするのを、ヴィックスが止めた。首を振ると「そっとしてあげようよ・・・」

・・・そうだね。

声には出さず頷いて応えようと、ユタはスフレを抱きかかえてシートに戻った。

おおおお・・・・・・おおおお・・・・・・おおおお・・・
・・・おおおお・・・・・・

悲しくも奇妙に美しい声が入江中に響き渡り、そして止んだのは夜もふけ、日付が変わる間際になった頃だった。

「もう・・・いい・・・」
ルックがふわりと降りてきた。

「うん。気が晴れた？」
優しく聞くユタは、なんとなく父親らしくマカには見えた。
「うん・・・ありがと・・・マカとヴィックス、スフレも・・・」
一人ひとりにしっかりと向き直り、礼がわりに震えるルック。

「寝にくいだろうけど・・・今日は泊ってって。
明日・・・送るよ・・・街手前まで・・・」
夕方の事を気にしたのか、すまなそうにルックが提案したプランに

「送る?・・・なんで？」
ルック以外の全員が首をかしげた。

「なんで・・・って。みんな・・・明日帰る・・・でしょ」

「うん。そうだけど」
あっさり肯定するユタ。
ルックは訳がわからずぶるぶる震えた。
「え・・・?え・・・?」

「ルックも一緒に帰るのよ。人間の街なんか通らないで、ね」

今度はヴィックス。いつの間にかルックの後ろに移動して、三人で囲むような形になっている。

ルックが泣いている間に三人で相談していたのだった。

「綺麗だけど、こんな寂しい場所にルック一人置いておけないわよ。私たちの村。どこに住めるかはまだ分からないけれど、ここや人間の街よりは断然マシなはず」

マカまでもルックを受け入れる気にいる。

「でも・・・僕、ここで・・・成仏・・・」

「今さらオバケぶった事言っても説得力無いよ。」

それに、ジョーブツっていったって身体があるかないかの違いだけ。

僕らからしてみたらルックが死んじゃうのと同じなんだから。それこそほっておけないよ」

ユタらしい無理矢理な理論に苦笑しながら、マカとヴィックスも頷いた。

「カエロ・・・ウチ」

ここぞという時しか起きないスフレも、この絶妙なタイミングで声をあげた。

「みんな・・・みんな・・・」

おおおお・・・・・・おおおお・・・・・・

先ほどまでとは違う、歓喜の泣き声が入江にこだました。

「そんなわけで」

長い怪談（？）話を終えた後、マ力は紅茶を飲み干し庭の一点を指差した。

「ルックはウチの庭に居る、の。」

本当に知らなかったの？スフレ」

マ力の綺麗に整えられ、毎年美しい花を咲かせる花壇の隅に出会った頃には無かった微笑を浮かべルックは居た。

満足しきったのか、成仏することもやめしゃべる事もなくなったが

赤ん坊だったスフレが成長した今も、マ力の庭でふわふわと浮いている。

「うん、知らなかった。ルックがあんまり自然に居るもんだから

当たり前すぎて聞こうともしてなかったよ、私」

オレンジの毛も長く綺麗に揃い、身長もとうに100cmを越えたスフレ。

相変わらず甘やかしに来るユタやヴィックスに影響され、はやくもイタズラ王の片鱗を覗かせてもいた。

「じゃあ、お父さんはどうだったの？ ルックがウチに来た時なんて言ってた？」

自作のクツキーを一つまみ口に放り込みながらスフレ。

マカは嘖き出すように苦笑すると、すぐさま答えた。

「お父さんも波乱万丈な人だからなあ。

もうこんな大事件にも慣れてたのか、全然反応なかったのよ。

ああ、また面白いのが来たなって一言言っただけ」

「うわあ、お父さんらしい」

親子2人顔を合わせると、大笑いした。

「ユタちゃんやヴィックスちゃんだけじゃないね。

お父さんの武勇伝も大変な事件ばかりよ。

昔の話、きりがなくらいいっぱいあるわ」

笑い涙を拭きながらマカは懐かしそうな顔をした。

「また今度聞かせてね」

「うん」

そんな午後の楽しいティータイムが終わる頃、マカとスフレの耳に聞きなれた足音と声が聞こえてきた。

「スーフレちゃん！ マカー！」

ユタだ。

マカは苦笑交じりのため息をひとつつくと、ティーセットを片付けにかかった。

「さて、今日はどんな事件を持ってくるのかしらね、ユタちゃんは」
ユタの足音は、なんだか今日も重い気がする。大きい物持ってくる

のかしら・・・。

何度体験しても慣れない衝撃を持ち込んでくるユタだが。

マカはその驚きを待ち望むかのように、ちょっぴりわくわくしていた。

終わり

その7（後書き）

オウルベアシリーズ第三弾「怪談」これにて完結です。

オバケを書きたい！というだけで書き始めたお話ですが、なんとなくいい話になってしまいました。

ちなみにルックのモデルは「ゼルダの伝説 夢を見る島」というゲームに登場する

オバケです。

サブイベントなのでこのゲームをプレイした人でも覚えていないかも・・・ね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3086s/>

怪談

2011年8月20日16時09分発行